

## 現代社会における幼児教育の問題点

— いろいろの実例を通じて —

森 田 宗 一

「出会い」ということ

最近の私は、旅から旅を歩きまわっております。が、どうも木枯紋次郎のように、あつしにはかかわりのねえことでござんす」といってもいられない問題が多々ございます。無所属一所不従の徒になりたいのが私の願いでございます。しかし、やっぱり社会の問題にかかわって生きねばならないのです。今まで裁判官として宮仕え三十年、ながいようでもあり短いようでもあった歳月でした。この間自主的に退官し、今まで以上広い分野で自由人の立場で、子どもの問題にかかわってまいりたいと念願いたしております。

教育も親子の関係も、要は人間と人間の出会いということであると思います。出会いに始まり出会いに終わる。出会いには

別れがあり、別れ際が大切。またいつの日か会いましょうと思いを残して別れたいし、それを会おう始めにしたいと思えます。

今日の幼児教育の問題点、それは出会っているようで真の出会いをしていないことだと思えます。そのはじめは、お互いが聞き上手ではないということだと思ふ。お互いがいう言葉すらむなしく、いくら話してもすれ違いになり、言葉多くして理解に遠ざかることが多いのです。その最初は、まず家庭で、幼児教育の場で、小学校で、聞き上手になるけいこをしていないということがあると思えます。人間の出会いというのは、肌と肌とのスキンシップとか、粘膜接触だけで出会っているのではないのであり、心と心との出会い、言葉というものを介しての出会いが人生であり、教育であると思えます。まず子どもはこの世に生まれて、お母さんのいうことを一生懸命きく——表情で

出会っている。これが物学びの始めであり、人生の始めである  
と思います。しかし、幼稚園でも保育所でも、いえ親がまず、  
そして先生が聞き上手でない。というよりも子どもを聞き上手  
に練習させていない。それだから小学校へ入っても、中学、高  
校、大学でも聞き下手ですね。

私も今、皆様の前でしゃべることにドキドキして、内心お祈  
りしているんです。「母よ私に語る言葉を与え給え」と。「人  
の身になっていいなさい」と母がよくいつてくれました。「そ  
れにはまず、聞き上手になること、そして自分の納得のいくこ  
とを人様の身になっていえるようになる」と……。人と  
人は言葉をかかわす。しかし言葉をむなしく乱発していても意味  
がないことです。特にこのごろのお母さんや先生に多いことだ  
すね。『愛語』ということ、人を傷つける言葉は使わないとい  
うことですが、私はこれを言葉をおしむととつたらどうかと思  
います。どういう言葉を選んで、相手が納得できることをいう  
か、ということは教育の大切な問題です。お母さんたち、女性  
はその一生懸命さが、言葉を乱発させることになるのでし  
ょうか、聞き下手では結局用いる言葉が相手に通じていないとい  
うことなのです。

さて、出会いとは邂逅かいちゆうということ。心と心の出会い、人と人

との深い出会いのことです。それは時の長短にはよらないので  
す。三十年一緒にいて、さぞすつかり出会っているであろう夫  
婦が、一日でもいいから別れたいということが家庭裁判所にも  
ち込まれ、またどうかすると、新婚旅行の帰りに別れたいとい  
ってくるのもある。どんな出会い方をしていたのかと思つてみ  
ると、ずいぶん多く、場所もところも変えて出会っていたらし  
いが、真まことに当たる出会いをしていない。どちらにも共通して  
いるのは、真の出会いがない、ということ、長ければよいと  
いうのでもないし、ほんの村雨の晴るる時の間に横顔で出会っ  
たにすぎなかった人と人とは、深い人生の縁につながることも  
いつの世にもあることです。

### 今この場の出会い

ここでちょっと申し上げたいのですが、あなた方がここに臨  
んだ姿勢と生きざまと心ばえは、あなた方のうしろにある何百  
もの子どもに大きな力を与えているのです。私も与えられた時  
間とテーマにそって聞く人の身になって話すことを努力いたし  
ますので、あなた方も、自分だけは例外だという考え方を、今  
ここから捨てることを実践して行ってほしいですね。今までは  
家でも学校でもそれで通ってきたかもしれないが、人生はそん

なに甘くはないです。教育とは、育児とはそういうことなのだと  
いうことを考え実践してほしい。私は臨床家として、生きた  
ケースから、その人の後姿と横顔はかくも子どもにうつるもの  
かということを学んできました。たとえば、ある保育所に、相  
談があるからと呼ばれていくと、玄関口に子どもが出てきてく  
れると、それを見るだけで、ここにはどんな問題があるかとい  
うことが、だいたいよめるようになりました。ケース(case)先  
生やふんい気が語ってくれるんですね。

とかく、何か問題があると、それを対象者として冷やかに眺  
め、むこう側に問題があると考えがちです。しかしあに計らん  
や、こちらの側にあり、その影がうつっていることが多い。子  
どもでなく問題は親であり、教師にあるのです。そして子ども  
こそわが師、ケースこそわが師という気持ちで接すると、その  
ケース自身が語ってくれる。こちらがわかつてやろうと力むと  
もうだめです。自ら語ってくれるものをこちらが受けるだけな  
のです。

現代は情報時代で、人と人をつなぐいろいろな便利なものがた  
くさんできています。便利なものを介して出会いやすい状況だ  
からこそ、せめて教育の場だけは、人と人の邂逅であり出会い  
を確保し、どうしたら聞き上手になり得るかということが大切

であろうと思います。それを忘れて、世の風潮に流れ、ものの  
生産消費機構に流されて、アップアップしているのはアホでは  
ないだろうか。形は変わっても教育はいつの世も、人と人の出  
会いにあるということを忘れてはおしまいである。素朴な牧歌  
調の時代ならば何もとりたてていう必要はないが、川のせせら  
ぎも奪われ、ものが間に入ってきてしまふ時代だからこそ、心  
と心、人と人、との出会いの再発見ということが大切だと思う  
のであります。

『五十八歳の青年の願い』という題で、この六月の毎土曜、  
朝日新聞の若者のページにコラムを書きました。それに対して、  
ずいぶんご親切なユーモアの無い人がいるもので(特に女性で  
すが)「五十八歳が誤植でないなら、青年でなく成年とかくべ  
きではないか」と電話をくれたのです。そこにこそユーモアが  
あり、横顔があり、読者との出会いの意味があるのに……。非  
常に熱心で生真面目すぎて、その意味をつかんでくれない。こ  
の題をつけるのにずいぶん考えたのですよね。

### 間接出会い

私は、三十歳になる長男を頭に五人の子があります。子ども  
はいつの間にか親をのりこえて成長していきます。今度生まれ

かわつたら女に生まれ、母となり、別れのつらさを感じながら再会と成長の喜びを味わいたいと思います。つまり、母子はベツトリから（まず十カ月胎内にて、さらに子宮外胎児などとポルトマンがいうように一年近く不完全のまま母のそばにしている）始まり、次第にセパレートして別れのつらさを感じながら出会い、再会して成長していくのだと思います。一方、父親は出会いのけいこをして親子になっていく。したがって男性には精神的に出会うことへの責任感をしつかりもたせなければならぬわけです。女性は離れることに痛みを感じますが、その別れのつらさの中に成長していくのです。少し離れなさい、といっておいた方がよいくらいに思います。それは教師にもあってはまることだと思います。

親と子、教師と生徒の關係は、真向きになりやすい。そこで工夫して、ユーモアのある、横顔・後姿のつきあいをつくつていかななくてはならない。ところが孫と祖母母とのつきあいになると、大分距離があり、真剣勝負の火花の散るといふより、間に責任者をおいての出会いですから、こちらはあまり立入らない方がよいのです。それは第一線の教師と園長との關係のようなもので、経験者かもしれないがアドバイザーであり、間接出会いが大事になるのです。

経験ほこり〱をすてて相手を見よう

— 赤ちゃんの必死な姿をも —

私の孫は九カ月ですから、もうヨチヨチやっています。人間の子どもは、人間性を学習するために一年間早く、母の胎内を出るのだといわれます。そして立ち上がった時が、人類としての誕生の時なのです。あの初めの一步を出す時の、不必要に大きに出すようす、実に楽しいんですね。歓呼の声をあげて……。（楽しく最初の時をもつのが教育の大切なところですよ）そしてまずよく笑うんですね。と同時に叫びますね。泣くんじやなくて叫んでいるんだと思います。その証拠に親が来てくると、何もしなくても泣きやんでいるのですから。

赤ん坊は笑うにも泣くにも、求める時ただ一つのこと全力である。それがすばらしいと思います。親は欲ばりすぎないだろうか。人生をこの一点にかけるということがあるだろうか。名誉もお金も信仰も適当にうすましにして得たいと思ひ、結局あぶはちとらずなのです。そこから、子どもとの出会いにズレがきているのではないか。何に賭け、何を呼び求めようとしているのか。赤ん坊くらい必死ならばいのちの源は、むこうから自ずときてくれるのではないか。あちこちに目が散りすぎ

ているから、子どもや青年からゲバをうけるのだと思う。少なくとも今の仕事にかけているあなた方は、欲ばらずに、全力で、しかし真向きになりすぎずに進んでいってほしいですね。

ついでに付け加えますと、非行少年などはその背景に何があるかは、その子の目をみているとわかるし、動いている姿をみると心の健康の度合がわかるのです。そして大人は横顔でわかるのです。そこにはどんな厚化粧でも隠せない人生の年輪があるのです。人と人の出会いを「みる」ということで理解するのですね。

そしていつでも素人のような新鮮な気持ちでみないと、対象者との糸が切れ、出会いが失われ、教育のゆがみを生んでしまいうこわさがあります。「経験ぼこり」ということでしょうか。

しかしまた、人間のことは連続として続くことなので、やはり先輩とか経験者のアドバイスをうけることは大事だと思うのです。あまり泣くからといって子どもを殺してしまった母親があります。決して愛情がないのではなく、真向きになりすぎ頭へ来てしまっているのです。育児書に首を突っこむばかりでなく、経験者に尋ねなさい、といたいですね。教育は長い歴史をもち、今の一コマをもっている、と考えれば、経験は評価されてきますね。

## 生活にユーモアを

今から十五、六年前のことですが、五十余年つれそつた夫に先立たれた老婦人が「……来年からは一人で年をとるのかな、と思った。にもかかわらず、別れぎわに女としての生きがいを見出し、今、喜びにあふれているのです。これからこの喜びを生かして生きていきたい、というのは、別れぎわに夫が私に、『ずいぶん、長い旅でしたね。いろんなことがあったね。ご苦労でした。(そこで一息のんで)おれはお前を真から愛していたよ』といってくれた。その一言ですべてが煙の如く消え流れ、これからの一人旅を充実させていけると思ったんですよ。でもね、別れぎわのあの一言でもこんなに生きがいを発見し、よかったのだから、せめてあの言葉を結婚の始めから、五年に一ぺんでいいから、小出しにいってくれたらよかつたらうに……。」といったのです。まさにこれがユーモアですね。そして、これをきいて私はドキンとした。私はまだいっていませんから、そして家に帰っていおうと思ったんです。けれどダメなんですね、練習していませんから。

日本では男の子にそういう練習をさせていませんね。相手の人の身になり、向うの側の身になって、さりげない心づかい

をし、ちょっとほめるなどということ育てていないんです。それからまた、泥んこあそび、木登り、結構じゃないですか。大きな森の中で、ガキ大将ぶりを発揮させて……。そういう幅ひろい生活が欠けています。今日の社会で、子どもにそういう生活を与えず、その場を奪っているのは誰ですか。狂った精神的風土になびいて、鍛練を忘れて人間性を育てていない。親や教師や為政者が悪いと思います。物優先の社会、自然破かいの政治・行政・企業の傾向、それに歯止めをして、青少年の場を人間関係の場を何とかしないと、日本はたいへんだと思うのです。

私は倉橋先生の「子どもは真向き、横顔、後姿で育つ」とか「入れない子にも杏れや梅の園」ということを初心として、非行少女とながいつき合いをし、今日までやってきましたが、「子どもというものは光に向かうようにつくられた、大人の先生だ」と思うことがしばしばです。

## ある作文

表現やユーモアができている子ども、〴〵気はやさしくて力あり、忍耐もあり、幅もあり、の子どもが十代になるとユーモアに参加できるものです。非行少年などの診断の勘どころは、九

歳・六歳・三歳・一歳時代の人間関係にある、そしてユーモアがわかるかどうかにあるのです。連合赤軍事件でも箱根山賊少年でも、皆いい子なんです。幼少時から箱入り息子の過保護、おあずけの味を知らない、そしてユーモアが欠けた中で育っているのが共通していることですね。また、今日の青少年の問題は、やんちゃ、いたずら、ガキ大将が育ちにくい、そういう幅がないということです。外へ発散できない内向型の力なしが多い。それも幼少時からの人間関係のゆがみの後遺症である場合が多いのです。一見、前者と全く異なるが、いずれも同じところから咲いたあだ花なのです。ユーモアがわかること、そこに参加できる人柄を何となく育てることが、幼児教育から学校教育の根底にほしいものです。

さらに赤ちゃん時代の親子の出会いの中に私の大好きな光景があります。若い母親の「イナイイナイイナイ」です。安定したお母さんのいう「イナイイナイイナイ」はユーモアがあるし、おふくろの味の素になるすばらしいものです。子どもは全力投球で、手足までふって笑っている、あれがいいんですね。そうするとまたお母さんも全力投球で「イナイイナイイナイ」をする。子どもは全身で受けとめる……。出会いの原点、ことばを通してのユーモアの原点はそこにあると思われるのです。

心身の問題の相談にくるお母さんの「イナイナイバー」の中には全力投球がない。子どもも義理では笑うけれど全身で笑いはしない。おっぱいなども押しつけるように与える……赤ちゃん「ちよつと子どもの心を知って下さいよ。こちらが求めてだんだんうまくついてみせるから」と思っているのでしょう。出にくい吸い初めもいろいろ工夫して出そうとしているんです。「イナイナイバー」もせっかちにやるので、子どもは義理で笑うが、全身で笑わない。そこから何かひずみが生まれてくるのです。

ではあたり前の「イナイナイバー」で育った子どもの作文例を紹介しましょう。何度か引用させていただいたものですが、ここでも紹介いたすことにします。農村の中学校のものです。この作文は中一の男の子の「こうもり」というものです。

『今から二十日ぐらい前だったと思います。父が、朝、県庁に行く時、母が買ってくれた濃い青の折たたみのこうもりを持って出ました。いったいに父は無頓着で、よく忘れ物をし、よく母に注意され、叱られていました。（これで当り前で、その逆だと気になるケースになるのですね）ふつう五時半ごろ帰るのですが、その日は時間になっても帰ってきません。僕はテレ

ビをみて待っていました。何時になっても帰ってこないの寝てしまいました。夜中になって、よっぱらって父は帰ってきました。玄関まで出た母に「こうもりあんべ、こうもりあんべ」と何べんでもいっています。「ありますよ。ありますよ、お父さん。ちゃんともっていらっしゃるでしょうに」と母がいくらいつても、何べんでも「こうもりあんべ、こうもりあんべ」と念を押していました。よっぱらったまま、それでも本気になっている父に、私たちは大笑いしました。そこがとっても好きでした。』

この勤務評定がいいですね。誰がこの余韻のある評価のできるパーソナリティを育てましたか……。英国ではユーモアを教育することが初等教育といわれていますが、それを日本で期待することができのでしょうか。現在の幼稚園にはどうでしょうか、疑問ですね。そうするとやはり、家庭ということになりますが……。あまり家庭に責任を押しつけるのは好きではないのですが）

私の扱ったケースに、同様の場面で、そばにあったカサで父親を突き、瀕死の重傷をおわせたというのがあるのです。おれはテレビをみて、おやじの帰ってくるのを待っていたじゃないか。それなのに酒のんで帰ってきやがって……。勉強おしえて

くれるっていったじゃないか、何という視野の狭さ、自分本位さ。仕事の都合ということがよめそうな年齢なのに……。そして父もおろおろあやまり、しかし子どもは「このくそおやじ」「くそとは何だ」「何だとは何だ」……でケガをさせたのです。同じことからはじまって、片やそこが好きと評価し……となったのは、やはりそこに至るまでの人間関係によるもので、暗い方の例には幼稚園の先生も共犯となってくるんです。

### 子どもはすぐにはとまれない

出会いとユーモアの薄れやすい管理体制のつよい社会、言葉多くして通じにくいやるせない現代。その中で、ことに子どもの世界はせめめられ窮屈にされています。たとえば、車の通るところだけ改造して、子どものあそぶ場を奪ってしまった。とび出すな、車はすぐにはとまらない。は逆ですよ。子どもは急にはとまれない。だから車は注意しろ。ですよ。子どもはすぐにはとまれないエネルギーの固まりだ。全力投球しているんだ。その子がのびのびと育つ場を与えよです。その大きな守りの中で、出会う練習をさす。あぶないあぶないの無難主義は次代の何と大きな難になっていることか。「それころぶ、それ危うし」という老婆心、すぎたる守り子らを失なう」と歌った人が

いる。幼稚園の先生として大いに考えてほしいことなのです。もう一つしつけのいろは歌、「惜しみなく物を与えて子どもらに自主性を与えぬ親の無慈悲さ」。これはよくあることで「家の子には何不自由なく与えておりましたのにこんなことになって……」という親が多い。おあずけの味、ブレイキ力、人の身になって考えることを幼少時から与えていないのです。ものはある、親も手があいている今、至れりつくせりの過保護から子どもを解放するのが、今日の教育の大事な点だと思ふのです。自然をあらわしている大人は誰ですか。今日子どもを生み育てることすら恐しいと感じ、子ども受難時代と感ずるのは母親としての実感ではないでしょうか。子どもを守るためには母親も教師も声を大きくして、「子どもはすぐにはとまれない、車よ注意しなさい」といわなくてはなりません。

### 倉橋惣三著、「育ての心」から

最後に、倉橋先生は大人の誓いとして「育ての心」を戦後、再刊されたが、その序を拾いよみさせていただきます。

『国敗れて、いちばん気毒なのは子どもである。がまた、いちばん希望をもたせるものも子どもである。濟まんねといっ



た心苦しさと、たのみますよといった頼もしさと、それが一つにこみあげてくる心もちで、じつと見まもりもし、抱きあげたくもなる。

悲しみも愛いも、まだ知らない。しかも、彼等の成長がだんだん彼等にわからせてゆくものを、彼等はどう受けとり、どう担ってゆくだろうか。思えば彼等の祖先も父母も、仮にも経験しなかった苦難の成長である……否むしろ、苦難のうちにこそそのたくましさを發揮せずにはないのが成長である。わたしたちは、この成長の真義を聊かも疑ってはならぬ。……わたしたちおとながどんな急転回に困迷することがあろうとも、幼きものの行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ。わたしたちは決してそれを怠ってはならない。教育は育つものに対する信仰である。信仰は如何なる時にも、世界を明るくし、励まし、活気づける。わたしたちが此の今日、子どもらと共に笑い、歌い、遊び得るのも、此の信仰が与える光明によってである。

わたしたちは光明をもつ。また光明について、会う人毎に語りたい。わけても母と教育者とは、追いかけていってもそれを語りたいわたしたちの相手である。或る人々は、余りにも微かに遠い光明だというかもしれない。しかし光明は、それを捉え、それに導かれる者にとっては、はっきりと眼睛に点ぜられ、近

近と脚下を照らすものである。……」

われわれは今この時、乳を求めて必死に泣く赤ん坊のように、ある一念にかけているかどうか、必死に探し求めているかどうか反省してみる必要がある。限界状況におかれた死刑囚や精薄児や非行少年たちが、よく光とか神とかいう言葉を詩や歌に書く。甘いのでなく、彼らのきびしい道でほんとうにそういうものに出会ったのではないでしょう。そして健康な子どもたちも、それを求めているのに、それに雲をかけているのは誰なのか。教師も親も為政者も、根本的に懺悔して、今日から出直さねば、日本の未来は危ない。私も初心にもどり、彼らとのつきあいのこれからの人生の旅に出たい。それには、子どもをみる眼をもう一度、再発見し、子どもとは何だったのか、子どもに影響を与えているのが後姿と横顔とを見直し、保育とは何だったのかを考えてみなくてはならないと思います。

(昭和四十八年七月二十四日 日本幼稚園協会主催 幼児教育講習会)

講演)